

Clegg, Sue, 2020, "Agency and Ontology Within Intersectional Analysis," Van Ingen, Michiel, Steph Grohmann, and Lena Gunnarsson eds., *Critical Realism, Feminism, and Gender: A Reader*, New York: Routledge, 163-179.

スー・クレッグ, 2020, 「インターセクショナルな分析におけるエージェンシーと存在論」.

※ ( ) の数字はページ数を表す。

### レジュメ作成者による紹介文

Sue Clegg はリーズ・ベケット大学名誉教授であり、専門は批判的実在論とフェミニスト理論、高等教育論である。

本稿で著者は、インターセクショナルリティ論において、構造とエージェンシーの間の分析的区別が曖昧になってしまうことを問題視する。著者はこの問題に対処するために、批判的実在論者である Margaret Archer の議論を援用し、批判的実在論を採用することが、インターセクショナルリティ論の再考において有用であると主張する。

## 1. 導入 (163-164)

- 本稿は、現代のフェミニスト的分析において最も重要で影響力のある潮流の一つであるインターセクショナルリティについて探求する<sup>1</sup>。
  - インターセクショナルリティの成功は、アクティビストの政治的関心とポスト構造主義的な感覚を結びつけたことにある。Kathy Davis が論じているように、インターセクショナルリティは、これら 2 つのプロジェクトの間の相容れなさを克服することに著しく成功している。
  - Davis の議論において、インターセクショナルリティ論における曖昧さや矛盾は、問題であるというよりもむしろその生産性の源として捉えられている。いっぽう本稿では、インターセクショナルリティ論における矛盾や緊張が、その説明の可能性を制限していることを示唆する。

---

<sup>1</sup> ブラック・フェミニズムに起源をもつインターセクショナルリティ・アプローチは、複数の社会的カテゴリーの交差 intersection によって生じる権力関係が、個々人の社会的立場や日常的経験にどのような影響を及ぼすのかを検討する。とりわけ人種、階級、ジェンダー、セクシュアリティ、国籍、障害の有無、エスニシティ、年齢などの数々のカテゴリーを、相互に関係し形成しあうものとしてとらえる点に特徴がある (Collins and Bilge 2020=2021: 16)。その学術的起源としては、Kimberly Crenshaw (1989) の論文「Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine (=周縁をマッピングする——インターセクショナルリティ、アイデンティティ・ポリティクス、ウィメン・オブ・カラーにたいする暴力)」が挙げられる。Crenshaw は、ジェンダーと人種が別々のカテゴリーとして扱われる結果、黒人女性がフェミニストと反人種主義者の両方の理論と政治において周縁化されてしまうという傾向に注意を促し、ジェンダーと人種の両方を考慮に入れ、それらの相互作用がいかにして黒人女性の経験を形成するのかに着目する必要があると主張した。

- 本稿は、批判的实在論、特に Margaret Archer の仕事をインターセクショナリティ論の再考のために有用であると主張する<sup>2</sup>。
  - ・ インターセクショナルな分析が直面する課題は、構造とエージェンシーの間の分析的区別が曖昧になってしまうことである。抑圧の経験とそれを生み出す構造の関係を曖昧にすることによって、創発の歴史性[the historicity of emergence]が瓦解してしまう。
  - ・ それに対して批判的实在論は、構造的プロセスと人々の有するエージェンシーの関係性を省略することなく説明する。Archer (1995) の用語を用いて換言すると、構造的に出現する特性 (SEPs) [以下、構造的創発特性]、文化的に出現する特性 (CEPs) [以下、文化的創発特性]、人々に出現する特性 (PEPs) [以下、人々の創発特性]のそれぞれの関係性について、省略することなく説明する。
- 本稿は以下の構成をとる。
  - ・ 第 2 節では、インターセクショナリティ論の概要を示し、インターセクショナリティが省略するものについて扱う。第 3 節では、批判的实在論の重要な概念について、特に形態形成[morphogenesis]に焦点を当てながら紹介する。第 4 節では、Archer のエージェンシー概念を検討する。第 5 節では、ポスト構造主義よりも批判的实在論の方が、インターセクショナリティ論にとって優れた理論的資源だと考える理由を再確認する。

## 2. インターセクショナリティ論 (164-167)

- インターセクショナリティは、1960 年代後半のフェミニストによる研究プログラムの延長線上に位置付けることができる。
  - ・ インターセクショナルなアプローチは、「主流派のフェミニスト的分析」を矯正するための必要な手段としてみなされた。1970 年代のフェミニズムは、中産階級の白人女性の経験を本質化／一般化したとして批判された (Segal 1987, 1999)。
  - ・ インターセクショナリティという言葉は、Kimberlé Crenshaw (1989) によって作られたもので、彼女は、ジェンダーと人種が別々のカテゴリーとして扱われ、その結果、黒人女性がフェミニストと反人種主義者の両方の理論と政治において周縁化されてしまうという傾向に注意を促した。

---

<sup>2</sup> 批判的实在論は、1970 年代後半にイギリスの哲学者 Roy Baskar によって提唱された方法論である。批判的实在論は、在論的实在論、すなわち、現実の大部分は、それに対する個々人の理解とは無関係に存在するという立場に立脚する。さらに、構築主義については、判断的相対主義を引き起こすとして批判し、それを克服するために、客観的实在を「超越論的分析 transcendental analysis」によって論証するとともに、世界の実在性をオープン・システムとしてとらえ、多元的な複合的因果連関を考察する方法論を展開している (佐藤 2016: 86)。

- Davis (2008) は、インターセクショナリティの有する曖昧さによって、フェミニスト理論家の関心とアクティビストの関心が一致したことを説得的に論証している。
  - いっぽうで Martinez Dy, Martin and Marlow (2014)によると、インターセクショナリティは「行使されず、実現されず、観察されない可能性のあるもの」(2014, p.452)を省略し、「超事実性 transfactuality」の存在論を排除する危険性を持つ。
  - 本稿はインターセクショナリティ論の再考にあたり、Martinez Dy, Martin and Marlow (2014) や Gunnarsson (2011, 2017)と同様に、構造とエージェンシーの間の分析的区別を可能にする批判的実在論の概念を利用する。

### 3. 批判的実在論と形態形成分析 (167-171)

- インターセクショナリティ論の分析的・方法論的な問題を解決するためには、創発の歴史性について論じた Archer の議論を援用する必要がある。
  - Archer は、構造とエージェンシーの上方、下方および中央における混合という、構造とエージェンシーの社会的現われに対して批判を展開した上で、分析的二元論が必要であると主張する。
  - 上方における混合とは、社会を個人の行為の単なる集合体としてみなすことであり、下方における混合とは、個人の行為を社会的な決定に還元するものである。これら2つの立場を乗り越えるものとして提起された Anthony Giddens の構造化理論は、中央における混合を採用している。この立場は、構造のあらゆる側面が行為に依存していることを踏まえ、構造とエージェンシーの分離可能性を否定する。Archerはこの立場を省略主義的な存在論として批判する。
- Archer は、構造とエージェンシーの上方、下方および中央における混合を批判し、形態形成論的アプローチを採用し<sup>3</sup>、構造とエージェンシーを分析的に区別する必要性を強調する。
  - そのさい Archer は分析的二元論を採用する。分析的二元論とは、構造とエージェンシーの関係について空間と時間の双方の観点から分析することを可能にする原理である。このモデルの主な特徴は、構造的創発特性 (SEPs)、文化的創発特性

---

<sup>3</sup> Archerによると、形態生成アプローチは構造とエージェンシーが異なる時間的な周期にわたって作用するありようを捉えることを目指す。形態 morpho という要素は、社会がなんらかのあらかじめセットされた形式 form も、あるいは選好された状態も持っていないことを承認する。また生成 genetic という要素は、社会がエイジェンツからその形姿を獲得し、エイジェンツによって形作られ、彼らの活動の意図された／されなかった諸結果から創出されることを認識するものである (Archer 1995=2007, 7-8)。形態生成アプローチは以下の2つの命題に基づく。すなわち、構造は必然的に、それを形態転換する諸行為に先行するという命題と、構造的なエラボレーションは必然的にそれらの諸行為に後行するという命題である (Archer 1995=2007, 107-108)。

(CEPs)、人々の創発特性 (PEPs) に着目する点にある。このアプローチによって、時間の経過に伴う構造やジェンシーの再構築を探求することが可能となる。

- 分析的二元論は、構造とエージェンシーの間のつながりを説明するという点において、インターセクショナルリティ論に貴重な資源を提供する。
  - 構造とエージェンシーの分析的区別の欠如は、「女性」のような分析的に有用なカテゴリーを維持する上でも大きな問題となる。Gunnarsson (2011) は、批判的実在論の説明のなかで女性というカテゴリーを擁護し、フェミニズム理論の出発点は、女性が「女性であるという事実によって」いかに抑圧され搾取されているかを示すことであると指摘している。
  - 批判的実在論の説明と形態形成的アプローチによって、分離しつつも絡み合ったプロセスについて、中央における混合に陥らない方法で扱うことができるようになる。
  - 形態生成分析の潜在的な説明力をさらに検討する前に、Archer によるエージェンシー概念を紹介する。

#### 4. エージェンシー (171-173)

- Archer (2000) のエージェンシー論の中心は、言語よりも実践の優位性を論じることである。彼女は、人間は構造にも文化にも還元できない特別な性質と力を有すると主張する。
  - Archer は、実践の優位性と人間の身体性の重要性を主張することによって、環境との関係における自己の出現の条件についての理論を構築している。そのさい彼女は、社会的な自己の概念とそうでない自己の感覚とを区別する。つまり、言説的に生み出される主観がある一方で、特定の人生の歴史を通じて体現された自己の感覚も存在すると考える。これはポスト構造主義の理論に見られる言語的優位性との決定的な決別である。
  - 本稿は Archer によるエージェンシー概念が、フェミニズムにおける政治的主体を溶解するポスト構造主義の問題点を打破するための強力な基礎を与えると主張する。

#### 5. インターセクショナルリティ論と批判的実在論 (173-177)

- インターセクショナルな分析においては、構造とエージェンシーの間の分析的区別が曖昧になってしまう。さらに、抑圧の経験と構造の両方について同時に語ることで、創発の歴史性が失われてしまう。
  - 一方で批判的実在論を用いることによって、構造とエージェンシーに関する特定のメカニズムを識別することができる。この識別作業は、「遡及 retroduction」と

「遡源 retrodiction」という哲学的モデルに基づく。

- ・ 遡及とは、社会の複雑な開放系における複数の因果関係の分析を通じて、具体的な現象を研究することである。批判的实在論に基づく理論的説明は遡及的であり、構造の根底にある因果的な力やメカニズムを特定し分析することを目指す。遡源とは、異なる抑圧の形態がどのように「具体的で多様な不平等のパターン」(Mirza 2009, p.3)を生み出すかを描き出す作業である。

## 6. 結論 (177)

- 本稿は、インターセクショナリティの発展のために形態形成分析が有用であることを主張する。形態形成分析は、社会を個人の経験に還元することもなければ、経験を社会に還元するのでもない。形態形成的な説明は、構造とエージェンシーを分離することによって、創発の歴史性を分析するためのツールを提供している。

### 【参考文献】

- Archer, Margaret S., 1995, *Realist Social Theory: The Morphogenetic Approach*, Cambridge University Press. (佐藤春吉訳, 2007, 『实在論的社会理論——形態生成論アプローチ』青木書店.)
- Collins, Patricia Hill, and Sirma Bilge, 2016, *Intersectionality (Key Concepts)*, Cambridge: Polity Press. (下地ローレンス吉孝監訳/小原理乃訳, 2021, 『インターセクショナリティ』人文書院.)
- Crenshaw, Kimberley, 1989, "Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics," *University of Chicago Legal Forum*, 140: 139-167.
- 佐藤春吉, 2016, 「産業社会論集『批判的实在論特集』編纂にあたって」『産業社会論集』立命館大学産業社会学部, 51(4): 83-91.